

蓮華文を有する陶板について ～塚原遺跡群出土未報告資料の紹介～

上田 龍児

1. 経緯

令和元年12月12日、大野城市の文化財収蔵庫を整理中に1点の資料（以下、本資料）が目にとまった。一見して瓦に見えたが、手にとって観察してみると表面に蓮華文を表現していることが分かった。新しい時代の遺物である可能性も考えたが、全体的に古代の遺物の雰囲気であったため、持ち帰って図化し類例を検討することとした。

本稿は、塚原遺跡群出土未報告資料を紹介するものである。

2. 塚原遺跡群の概要と出土状況

(1) 遺跡の概要

塚原遺跡群は大野城市牛頸に所在する。牛頸川

左岸の河岸段丘上に位置し、牛頸窯跡群の中央部にあたる（図1）。

1991～1993年度にかけて発掘調査を実施し、1994年度に報告書を刊行した。調査では古墳時代の群集墳、古墳時代～古代の集落跡や縄文時代集落の一部を確認した（図2）。群集墳は調査区南側に位置し、5世紀後半に始まり6世紀前半頃まで新規造墓が認められる。6世紀後半～末になると群集墳の北側に集落が出現する。一部は古墳を破壊して竪穴住居がつけられており、この段階になると古墳への営みは停止していた可能性が高い。当該期は牛頸窯跡群で窯の基数が増加する生産の拡大期にあたり、周辺では多数の竪穴住居で構成する集落が複数出現することから、塚原遺跡の集落の出現もこの脈絡の中で理解できる。竪穴住居は30棟ほどあり、多くは6世紀末～7世紀前半頃のもので、7世紀中頃～8世紀後半まで継続する。竪穴住居群の東側・北側には掘立柱建物が複数あり、詳細な時期は不明であるが住居群と併



図1 塚原遺跡群の位置

存する可能性が高い。このほか、住居に混在して多数の土坑があり、大半が8世紀の廃棄土坑である。なかでもSK12などは多量の須恵器が出土しており、出荷する須恵器の選別に関わる遺構である可能性も指摘される。牛頸窯跡群が終焉を迎える9世紀前半には集落が断絶することからも、須恵器生産に関わる集落と想定される。

(2) 出土状況

本資料が収納されていた袋には、「21号墳石室

アナ 911118」というラベルが伴っていた。21号墳は群集墳の中では最も北側の集落域に近い場所に位置する。直径8mほどの円墳で、墳丘は完全に消滅しており、横穴式石室の基底石および敷石の一部が残存する。石室中央～奥壁は、直径1.5～2.0mほどの円形土坑により破壊されている。ラベルに記された「アナ」というのは、この円形土坑（報告書では「攪乱」と表現）である可能性が高い。なお、同じ袋に収納されていた遺物は、古墳時代～奈良時代の須恵器が主体であり、本資

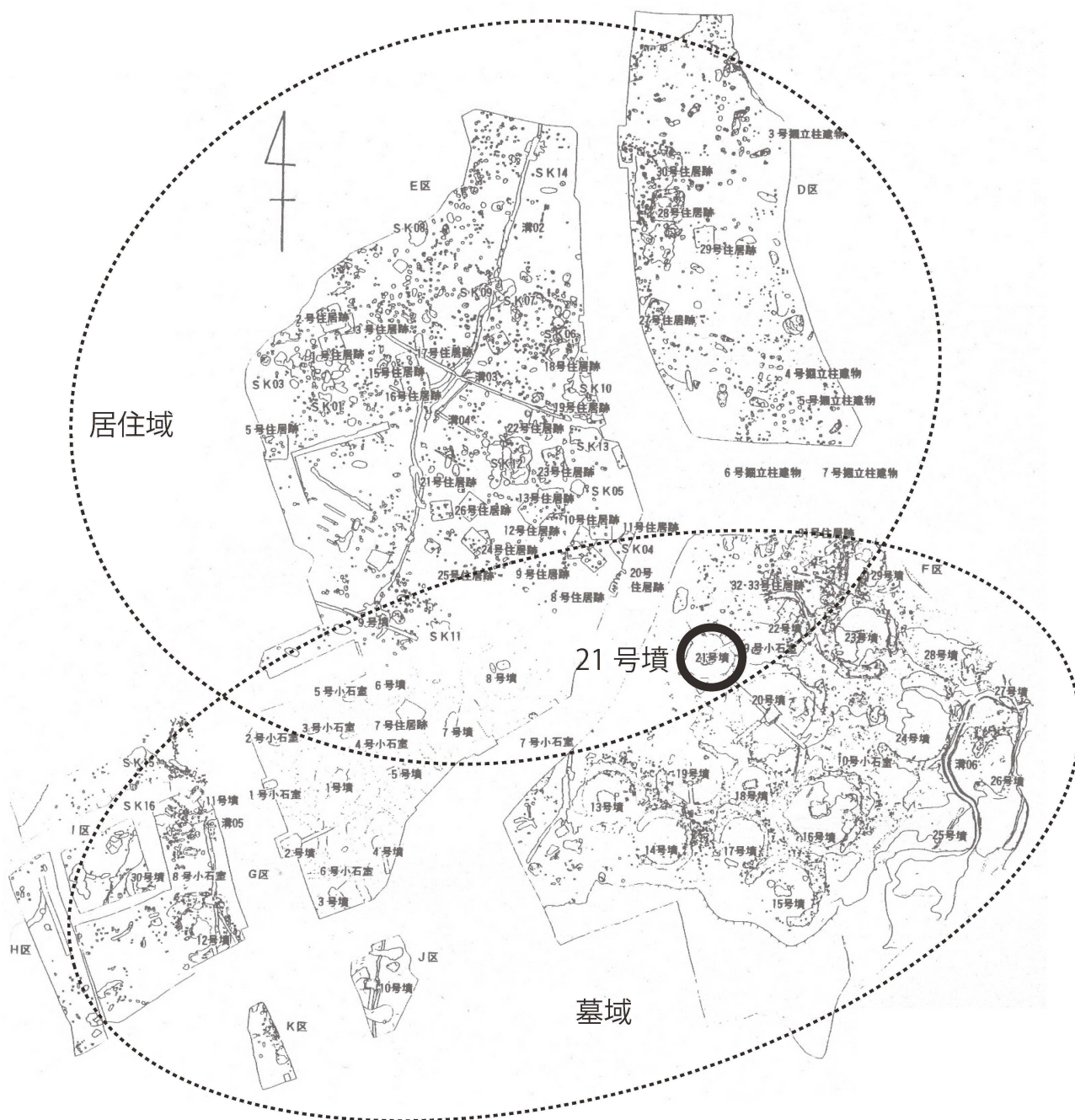


図2 塚原遺跡群遺構配置図

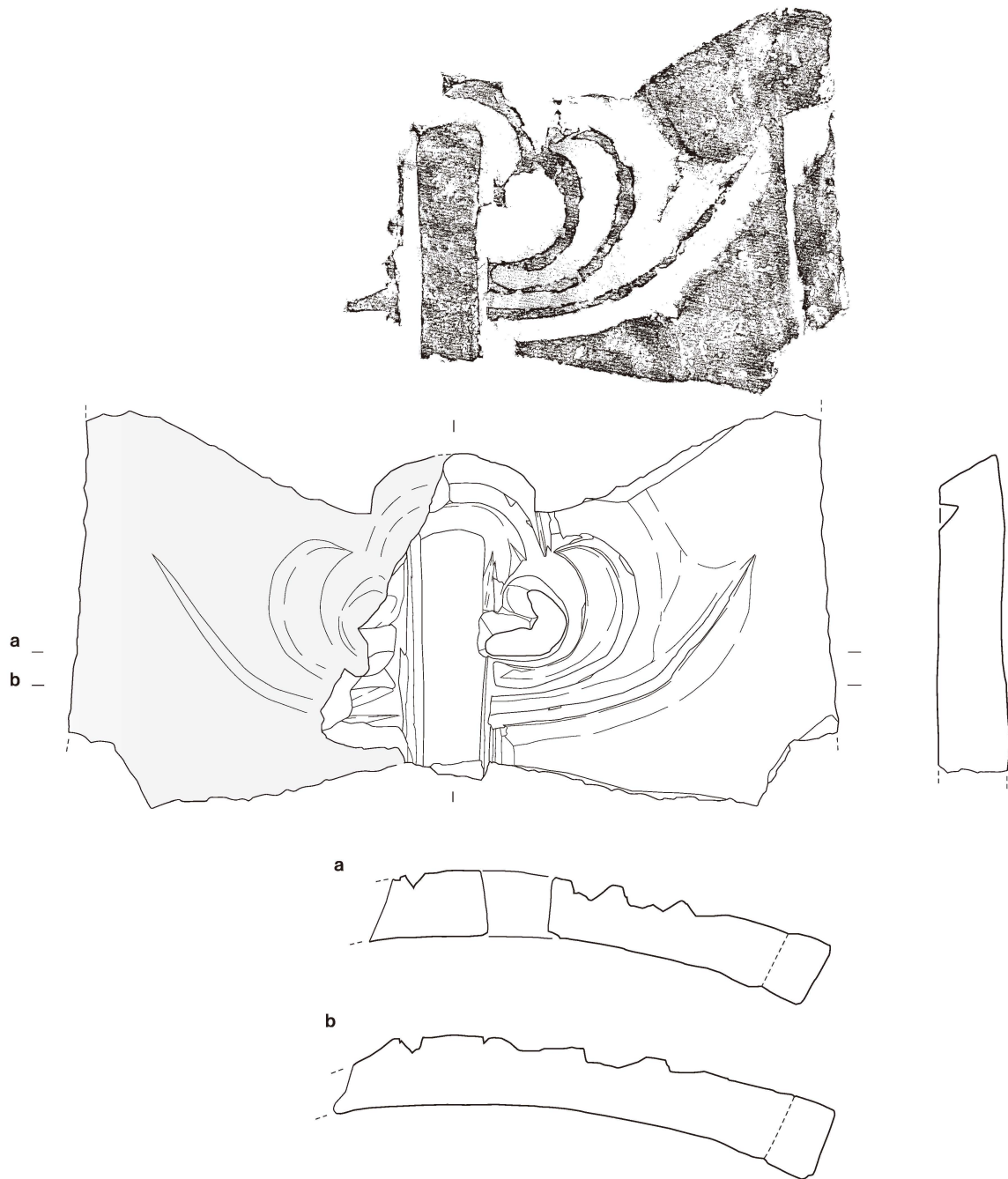


図3 塚原遺跡群出土の陶板



写真1 陶板（凸面）



写真2 陶板（凹面）

料はこれらと一緒に出土したものと考えられる。ただし、本来的に円形土坑に伴うかどうかは不明であり、明確な共伴遺物は不明といわざるを得ない。

3. 資料の紹介 (図3、写真1・2)

図3に図示した。破片であるため全形は不明であるが、厚さ1.9～2.3cmの板状を呈し、現状の幅は15.7cm、推定復元で最大幅23.4cmである。短軸方向に若干湾曲しており、平瓦のような形態となる。片面（以下、凸面）に側面観の蓮華文を表現する。2本の直線的な線刻により中軸線を描いた後、頂部を削り出し、中心部の花卉を透かし彫りする。その後、中心側の花卉から外側の花卉へと描画していったことが、粘土の乾燥状態から復元できる。ヘラ状工具により施文しており、ヘラケズリ状の痕跡が残る。鉄刀子のような工具が想定できよう。凸面は不定方向のナデ、裏面（以下、凹面）は横（短軸）方向のナデである。側縁部は幅1.5cmほどの粘土紐を継ぎ足しており、側縁部にケズリを施し、継ぎ足し部の裏面は縦方向のナデを施す。タタキの痕跡や布目痕・模骨痕は確認できず、端部に継ぎ足しがあることや凹面・凸面を丁寧にナデる点など、通常の平瓦の製作技法と

は異なっている。

焼成は良好で瓦質というより須恵質である。凸面は褐灰色、凹面は灰色を呈する。胎土中に1～2mmの白色砂粒や黒色粒子を含む。器面には靱殻状の圧痕が複数有り、破断面でも確認できることから混和材の可能性はある。また、胎土中には繊維状の物質を含む。

4. 類例の検討

側面観の蓮華を表現した瓦や鴟尾もしくは瓦塔のような器物である可能性を想定して、類例を検討した。

側面観の蓮華を表現した資料 ①近江に分布する蓮華文方形軒瓦、②大阪・西淋寺跡や扶余王興寺の鴟尾などが挙げられる（図4）。

本資料はわずかに凸状を呈する面に施文することから、①の可能性は低い。また、推定幅25cmほどであり鴟尾にしては小さく、また横方向に湾曲していることや側縁部も表面と同程度の焼成具合であることから、②鴟尾の可能性も否定される。

このほか、近いモチーフを有す資料としてパルメット文を有する隅木蓋瓦もあるが、やはり湾曲することや側縁部の焼成具合から可能性は低い。

瓦塔 瓦塔で透かしを有する部位として、水煙が



図4 側面観の蓮華を表現した資料

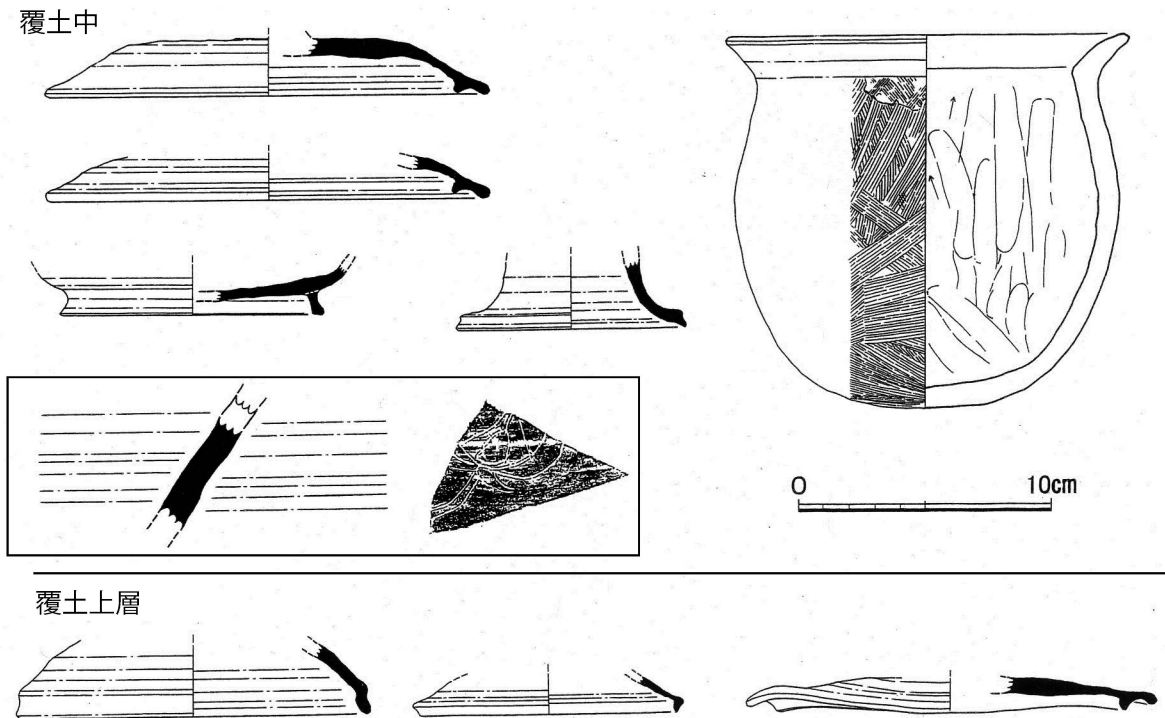


図5 上園遺跡14次SC12出土遺物

ある。本資料は凹面には文様がなく、片面のみを見せる意図がうかがえることから、水煙の可能性はない。また、瓦塔に伴う水煙と仮定した場合、非常に長大な瓦塔を想定する必要があり、この点からも否定される。

5. 結論

性格 凸面に蓮華文の側面観を透かし彫り・線彫りで表現した陶板、という以外に用途・機能については全く不明であるが、蓮華文という性格上、仏教的な器物が想定される。実際、牛頸窯跡群では、瓦はもちろんのこと水瓶・托や瓦塔を生産し、本堂遺跡では8世紀後半を中心に仏教的な性格が強い墨画土器や香炉蓋・相輪形鈕蓋、「識」・「山門」銘墨書土器などの仏教的遺物が出土している。また、本堂遺跡12・17次SB04のような村落内寺院と考えられる遺構や、御供田遺跡（九州大学筑紫地区遺跡群）でも古代の寺院跡が確認される。

以上より、本資料は仏教的な器物であり、道具瓦の一種である可能性を提示しておきたい。

製作時期 製作時期については不明である。上述したように、本資料を道具瓦と仮定した場合、塚原遺跡群では7世紀中頃以前のいわゆる初期瓦が

伴うものの奈良時代以降の瓦が出土していないこと、類例のない珍奇な1点ものであることから、牛頸窯跡群で初期瓦を生産する6世紀末～7世紀前半頃の所産である可能性を提示したい。

ところで、牛頸窯跡群開窯期以来の須恵器工人集落である上園遺跡では、7世紀後半の堅穴住居の中から側面観の蓮華文をへら書きした須恵器片が出土している（図5）。上園遺跡では7世紀以降の資料がやや乏しく、特に7世紀後半段階における評価は今後更なる検討を要するが、周辺では依然として須恵器の窯が継続していることから、工人集落であった可能性は充分想定できる。したがって、牛頸窯跡群内には少なくとも7世紀後半には側面観の蓮華文を表現しうる須恵器工人がいた可能性が高い。塚原・上園の両資料とも側面観の蓮華文を表現する点で共通している点は非常に興味深い。

以上、本資料について7世紀前後に生産された道具瓦の一種と想定した。当該期の牛頸窯跡群では、渡来人が居住し窯業生産に関わっていたことが明らかになっている。塚原遺跡群で出土した蓮華文を施す陶板は、いち早く外来文化を摂取し、焼物として生産するという牛頸窯跡群の特徴の一

つを示す資料である可能性がある。

いずれにせよ、類例不明の器物であり、年代や性格については根拠が脆弱である。今後も継続して類例の探索を行うとともに、検討を進めていきたい。

図3は上田が実測、小嶋のり子が製図・採拓した。写真1・2は上田が撮影した。その他の図は、各参考文献より引用（一部改変）した。

謝辞

本稿をなすにあたり、ふるさと文化財課職員より教示を得た。また、一般的な瓦との比較については元大野城心のふるさと館職員主税和賀子氏よりご教示を得た。記して感謝申し上げます。

【参考文献】

滋賀県教育委員会・滋賀県文化財保護協会，1975，『榎木原遺跡発掘調査報告―南滋賀廃寺瓦窯―』。

大野城市教育委員会，1995，『牛頸塚原遺跡群』，大野城市文化財調査報告書第44集。

羽曳野市教育委員会，1995，『古市遺跡群XVI』，羽曳野市埋蔵文化財調査報告書第32集。

大脇潔，1999，『日本の美術 第392号 鴟尾』。

羽曳野市教育委員会，1999，『古市遺跡群XX』，羽曳野市埋蔵文化財調査報告書第37集。

大野城市教育委員会，2008，『牛頸窯跡群―総括報告書―』，大野城市文化財調査報告書第77集。

九州大学総合博物館，2009，『奴国の南―九大筑紫地区の埋蔵文化財―』（九州大学総合博物館平成20年度公開展示・九州国立博物館トピック展示図録）。

大野城市教育委員会，2015，『上園遺跡5―第14次調査―』大野城市文化財調査報告書第130集。

洪パルグム（翻訳：岩戸晶子），2020，「9 韓国の鴟尾」『鴟尾・鬼瓦の展開―鴟尾―（古代瓦研究会第20回シンポジウム発表要旨』，奈良文化財研究所。

上田 龍児（うえだ りゅうじ）

大野城市教育委員会ふるさと文化財課係長